



**Boring  
to  
Me**

全てがスローモーションみたいに動いていた。

私の右手は国語辞典を持ったまま、まるで漫画のオノマトペみたいに「ぶん」と空気を切ると、ゆっくりと弧を描きながら彼の頬にめり込んだ。「ごり」とやっぱりオノマトペみたいな音がして、彼はそのままその場に崩れ落ちた。うう、とうめいたような気がしたけれど、それはすごくちんけな感じで笑ってしまう。辞典から伝わる衝撃が指先をしびれさせる。倒れた彼をじっと見つめた。彼は顔を伏せていて、ううとかああとかそういうことをうめいていた。突っ立ったまま上から眺めていたけれど、一向に起き上がる気配がない。私に仕返そうとはしない彼にイラついて、転がる背中を思い切り蹴飛ばした。「どん」とくぐもった音。続いて咳き込む音。うう、と、またうなる。横向きになっていた体を仰向けにして、赤くなった左頬を両手で押さえて。「……は、は」

彼からなんとか漏れたのは笑い声。それが私を笑う意味なのか彼自身を笑う意味なのかわからない。なぜなら私の脳内ではぷつつん、と何かが切れる音がして彼をぐちゃぐちゃにしたい衝動が走ったからだ。高校のとき、魚類や鳥類は脳が小さいから理性がないんだって話を聞いたのか、勝手に思ったのか定かではないけれど、今の私は脳がなくなってるんじゃないかって思う。彼に馬乗りになって、国語辞典でもペットボトルでもとにかく何でも手にとって殴って殴って殴りまくった。殴って、殴って、殴るたびに彼がもらす嗚咽が、私をあおる。ヘンタイ。心の中で自分を罵る。そうすればそうするほど、私の腕は止まらない。バカみたいに、いや、ただのバカなんだけど、とにかく殴って殴って殴って、自分の手の感覚がなくなった頃ようやく彼からどいた。怒っているのか泣いているのか、わからないけれど、涙と汗と鼻水と血でぐちゃぐちゃになった彼はぼんやりと、見下ろす私を見ている。ぼーか。声には出さず、声の動きでそうやってやった。ヘンタイ。そうとも言った。そしてへらへら笑った。どうしようもなかった。鼻の頭に汗をかいている。五月ももう終わる。そう思いながらへらへら笑っていたら、バカみたいに泣けてきた。そうしたら彼も泣き出した。ああ、とかううとか、うめいてるのか泣いてるのかとにかくその全部で、彼は泣いている。私も、泣いている。

嗚咽の間にふん、ふうん、と死にそうな犬みたいな呼吸をする彼を横目に、私は部屋の隅に座ってタバコに火をつけた。視界に映るのは転がる彼と、何も貼ってない白い壁、ほとんど荷物が乗っていないシルバーラックと小さな机。毎回毎回こんなに暴れていても、私の暴れ方がいいのか彼の倒れ方がいいのか、破損したことは一度もない。さっき投げたコップが姿見に当たったけど、割れたのはコップだけだった。いつも小さなものばかりが壊れる。小さなものが壊れるだけで、ほかには何も影響もない。それに腹が立って私は彼を殴ったんだ。深呼吸の代わりに煙草を吸う。灰皿がなくて、自分のデニムに灰が落ちた。息を吐き出す。まだ泣いている彼。私は壁にもたれて紫煙の行く先を見つめているけれど、彼の泣き声が鬱陶しい。足元に散らばっていたコップの破片を、彼にむけてなげつける。びくりと波打った体は、一瞬固まって、思い出したようにまた呼吸を始めた。

「あ、由樹さん」

大学の食堂でゼミのテキストを読みながらコーヒーを飲んでいると、サークルの後輩だったの浅木がスーツ姿でコーヒー片手に現れた。ため息をつきながら、ネクタイをゆるめて私の向かい側に座る。一ヶ月ぐらい前に会ったときは髪の毛も長くて茶色かったのに、今はいかにもな好青年という感じで黒髪短髪、肌の色も心なしかつややかになっている。そういう健康そうな面をしているのが一番ムカつくので、テーブル下で思い切りすねを蹴ってやった。今日は先の尖ったパンプスを履いていたから、たいそう痛かったらしく浅木は大げさにも見える仕草で突っ伏した。

「もー、キョーレツ。久しぶりなのに、由樹さんは相変わらず」

「スーツなんか着て何してんの」

「シューカツ。世の中みーんな由樹さんみたいに要領よくできないの」

特に興味もなかったので、ふうん、と生返事をしただけでもう一度テキストに目を移す。それが気に食わなかったらしく、浅木はつらつらと今日のシューカツはどうだったかとか今はどれだけ不況だとか、とはいえ内々定をもうすでにいくつかもらっている、なんてことをしゃべっている。私はその手の話を好かないということを知っていて、わざとしてくるところが浅木だ。にやにやと笑って嫌がるのを見ているのが好きで、しかも触れるか触れないかのいやらしさだからまた腹立たしい。要領がいいのはあたしじゃなくお前だろう、と思ったけれどそれを言うのも癪だったので黙ったままでいた。

「んで、悠さんとは上手くやってんですか」

「何が」

「付き合い。ちゃんとエッチしてんの？」

今度はさっきよりも三割り増しで思い切りすねを蹴り上げた。う、とくぐもった声を出し、イスの上で仰け反って悶えている。

今朝方、私を送り出した彼を思い出す。昨日散々殴ったせいで彼一悠の顔は腫れて頬は青紫色になっていた。このまま悠の顔が変形したままだったら、私はもう彼に手をあげることなんてしないだろうか。そもそも私はどうして悠に手をあげるようになったんだろう。私を見送る悠を見つめてそう考えていたけれど、相変わらず静かに微笑んで悠はいつてらっしゃい、と聞き取りにくい声で言ったから思考は途絶え、返事をせずに家を出た。

「ツンデレっていうんですよ、実はそういうの。俺はキライじゃないけど」

「私はあんたのことスキじゃないけど」

「でもこうやって相手してくれるじゃん。そういうのがツンデレっていうんだってば」

もう一度蹴ろうと思ったが、さすがに学んでいたらしくニヤニヤしながら避けられた。放課後の食堂は人もまばらで、とくにはばかる必要はないように思われたので手を伸ばして頭を思い切りはたいてやった。よい音がする。頭になんにも入ってないんじゃないの、と言うとうるさいなー、と笑う。

「悠さんにもいつもこんななんですか」

「何が」

「すぐに蹴ったり、殴ったりして。あ、でも由樹さんが意外に甘えたがりだからそんなことないのかな」

「また殴られたいわけ？」

「もー、ドSなんだから。悠さんはきっとドMなんですよ。こんな由樹さんに付き合ってもらんだから」

「ばかじゃないの？」

「何が？」

思い出されるのは、彼のあの泣き声、嗚咽、汗をかいていた肌、見下ろす私を見つめる瞳、何も映らない瞳。私さえ映さない。ご飯を食べても話していてもセックスをしていてもそして痛めつけたって、何をしたらって、あの瞳には私は映らない。

私はしゃべるのも億劫になってタバコに火をつけながら、テキストに目を落とした。も一、ここ禁煙でしょ、という浅木の声聞いていたらふよふよとテキストの字がにじんできて、あ、何、どうしたの、という声で顔をあげて初めて自分が泣いていることに気づいた。悠を殴った手の甲がじんじんと痛んで、どうしようもなく、私はこんなにも痛みにも弱いということを、テーブルの上に落ちる自分の涙の粒を見つめながらぼんやりと思う。浅木は自分が余計なことに触れたのかと心配になったらしく、盛んにどうしたのとか大丈夫とか声をかけてくるけれど、言葉よりも涙が先行してしまって思考も停止していて、何も言えない。ただただ指先や二の腕や手の甲が痛くてじんじんと熱くて、悠の泣き声や殴られて横たわる姿が鬱陶しいと思っていたのに、今の自分の方がよっぽど鬱陶しくて、涙が余計にぼろぼろ落ちた。

何を言っても私が泣き止まないで、浅木は大きくため息を一つだけして乗り出していた身を引っ込めた。そうして私の指に挟んだままのタバコを引き抜いて、自分のコーヒーの飲みさしに突っ込んで火を消した。しばらく泣いている私をじっと見ていたけれど、飽きたのか気を利かせたのか横を向いて窓の外を眺めているようだった。

西側の壁が全面窓になっているここには、五月が終わりじき六月になる日差しが新緑に遮られながらも、堂々と白い床を染めていた。今年の梅雨は長引くといっていたのは、今朝の天気予報。それを悠も私も黙って見ていた。そういうことを思い出せば出すほど、胸が痛い。浅木は学内を歩くまばらな人影を見ている。ゆるやかな午後。たまに私たちのテーブルを通り過ぎる人が、私が泣く姿に驚いているのもわかった。

「由樹さんは」

私が泣き止んだ後、いつのまにかテキストを勝手に読んでいた浅木は顔を上げて少し苦笑いをした。

「俺とはエッチしてくんないでしょ」

「死んでもやだね」

「ね。じゃ、俺行きます。由樹さん、アイメイク全部落ちてるからひどい顔してる」

立ち上がった彼は吸殻の入ったカップと、私が飲み終わったカップを持って席を立った。ひらひらと手を振ってみせると微笑んで去っていった。

日が長くなり暗くはなっていなかったが時計を見ると随分時間が経っていた。バッグから鏡を取り出して見ると予想以上にひどい顔をした不細工な女がいて、目の周りも真っ黒でぎしぎしと傷んだ金に近い茶髪で眉毛もなくて。はは、と笑いがこぼれた。返ろうと立ち上がる。

大学からバスに乗り、駅からは電車に乗る。耳にはお気に入りの音楽。電車が混むにしたがって音量を上げた。人の汗のにおいと、どこか草いきれのにおい。夏が近づいている。ふと目の前の席にカップルが座っているのに気づく。大学生か、男はTシャツにデニム、女は白いシフォン生地ワンピースに赤いパンプスをはいている。いかにもデートから帰ってきたような感じに、思わずしらけた目を向けてしまう。とはいえ当人たちはまさか目の前に立ってるひどい顔したギャルもどきが、そんな風に思ってることなんか知るよしもなく、二人の世界でくっちゃべってる

。私と悠にもこんなときがあったっけ。彼らは何を思って付き合っているのだろう。きっと、彼氏の方も彼女の方も、相手を殴りたいなんて思ったことはないはずだ。私は、悠は、どうだろう。必死に記憶を手繰り寄せようとしたって、古ぼけた日記の頁をめくるみたいに簡単に一つ一つがただ通り過ぎていく。昔は、記憶っていうのはもっと生々しく残っていて、思い出したらそのときにタイムスリップしてその感覚を思い出すんだって、そう思っていたけれど実際はそうじゃなくて、ドラマの回想シーンなんて、小説の回想シーンなんて、嘘だってことに気づいた。そのとき考えていたこと、感じたこと、そういうものはただ情報であって私の中の「感情」でも「感覚」でもない。それでも、私は必死に古ぼけた日記をめくる。いつ。私はいつ悠を好きになって恋人になってキスをしてセックスをして、私たちは目の前の恋人たちと同じように触れ合って気持ちを伝えていたはず、なのに。けれど何も伝わらないことに気づいて、彼から何も得られないことに気づいて、普通に触れることが怖くなったんだろう。

いつ？始まりもよく覚えていないけれど。昨日ほどひどくしたのは初めてだった。

もちろん、悠にあんなに手ひどいことをしたのだから、私の指も腕もどこかしこの骨もまだにわかにはじんじんする。殴りなれているわけじゃないから、ヘタなんだろう、なんて思ってそっと右手の手の甲を撫でた。まだそこに、悠の頬の熱があるみたいでなぜだか鳥肌がたった。怖くなる。自分に対して、悠に対して。私のふるう暴力はひどくなっていく。なのに、彼は罵倒することも、非難することも、手をあげることも、何もしない。ただ、受け入れるだけ。

目の前のカップルが少し慌てて立ち上がって降りていった。くすくす笑って二人はホームを歩いていく。電車が発車して、空いた席にまた誰かが座る。

電車を降り、アパートが見えてくると窓に電気がついていないのがまず目に入る。今日は悠の仕事は休みだったはずだけど、いないらしい。携帯をしてみるが特に連絡は入っていない。あえてゆっくりと階段を上ってドアの前に立ち、耳からイヤホンを抜き取る。ミュージックプレーヤーのスイッチを切る。じんわりと脇に汗をかいていた。ポケットから取り出した鍵を差し込んで真っ暗なまま玄関に入りドアを閉める。真っ暗。手探りで電気をつけてすぐに、ダイニングのテーブルに手紙がのっているのに気づく。広告の裏に書かれた、彼の綺麗な文字は、感情も何も伝えようとはしない。

『急な呼び出し。少し帰れないかも、ごめん』

タバコを吸おうとカバンのミニポケットに手を突っ込んだが、ない。そういえば昼間に吸ったのが最後の一本だった。ライターだけがポケットから落ちて床に転がる。カツーン、と無機質な音がどこまでも響き渡るようだ。締め切った部屋は空気が悪く、鼻にも額にも汗が浮き出てくる。しゃがみ、ライターを拾ったとたんに涙がでてきた。こんなにも今、悠がいなかったことが悔しくて、声をあげて泣きながらその紙を破いて捨てた。

二、三日して夕方に悠が帰ってきた。スーツを着ていて疲れた顔で玄関から黙って入ってきた。私はというと、レポートのために資料を整理しながらパソコンに向っていたので、最初は彼に背中を向けていた。彼がダイニングを通過してこちらの部屋に入ってくるのを背中で感じる。

「ただいま。後輩がやらかしてくれてさ……会社に泊まるなんてびっくりしちゃうよ」

ネクタイを緩める音。ジャケットを脱ぐ音。すぐ後ろに座る音。まだ振り向かない。しゃべらない。振り向いたら負けてしまう気がする。網戸にしてある窓からは、ぬるく湿った夕方の風が吹き込んでくる。カーテンがかすかに揺れている。パソコン越しにそれを眺めながら私はすぐ傍にあった、分厚い本を手取る。これが今、必要なのか必要じゃないのか、もう思考回路は停止している。ただの一粒一粒の文字の並びが、今、私にどんな救いを与えてくれるのか。

「……すごい本。レポート、大変なんだ。何やってんの？」

ずっと彼のアゴが肩に触れる。少し汗臭い。タバコの匂いもする。吸ってるくせに、ここでは絶対に吸わない。私は吸うし、その灰皿を彼に投げつけたことだって何度もある。なのに、彼は、ここでは絶対に吸わない。顔を右に向けた。目が合う。頬はまだはれている。口元にも目元にも小さな痣がある。けれど。

何も見てない目。何も映さない目。

私が見てみぬふりをしてきたもの。

「痣、残ってるね。痛かった？」

「いや……」

「会社に泊まったの。それで思う存分タバコは吸えたの？」

「……由樹にお土産があるんだよ、ほら駅前のベーグル——」

右腕で彼の顔を振り払いながら立ち上がった。本当は避けられるくせに、彼はダイニングとこの部屋を区切るガラス格子の引き戸に派手にぶつかった、が、ガラスは割れなかった。がしやんがしやんと反響音が部屋いっぱいに響く。耳障りな音、耳障りな鼓動。

「っぎけんじゃねーよ、スカしてんじゃねーよ」

見つめてくる彼の左頬を右足で蹴った。げほ、とむせて床に倒れこむ。私はそこらへんに散らばったプリントをさらに蹴散らして、本だって踏みつけて彼に馬乗りになった。悠は、セットが崩れた髪の毛の間から私を見つめている。何も、問うてこない。

何も、私に、感じてない。彼は、私に、何の思いだって感じてないのだ。

何も。

拳を彼の顔面に振り落とした。頬骨のへこみに第二関節がめり込む。その衝撃で、悠の顔は床にバウンドしてぶつかった。ごっ、と音がして息が荒くなる。三回、同じようにして殴った。ごっごっごっ、音が三回。痛みか衝撃か、そのどっちかかきしめないけれど、麻痺してしまって口が上手く閉じないらしい。彼は口から床によだれをたらした。は、は、と息をしてる。言葉は発しない。私は彼からどいて、横向きに倒れる彼の横腹を上から踏みつけた。うへ、と、間抜けな声が彼の口からもれる。腹がたって今度はみぞおちにつま先を突っ込んだ。あ、と細切れの嗚咽。彼の、そうした一つ一つはただの呼吸で、悲鳴で、嗚咽で、決して私の名前を呼びもしない。聞



きたい二文字を、そのばかげた二文字を形成する音を、彼は、作らない。

悔しくて、こんなにも私が悠をスキなことが悔しくて私は泣きながら彼を殴った。どうせなら、私が殴られたい。めちゃくちゃに、ぐちゃぐちゃに、鼻血だって口の中をきったって、いい。その目に、私を映して欲しいだけなのに。

「ねえ、なんで何も言わないの、なんで何もしてこないの、そうやって、はるは、いつも、そうやって――、殴ればいいじゃん、ぼこぼこにすればいいじゃん、何で何もしないの――」

ひゅう、と彼が息を吸った。そして、はっきりと答える。

「やだ」

足元に転がっていた本を掴んで――辞書ぐらいの厚さがある論文集だった――、彼の横顔を殴りつけた。ごふ、と咽喉の奥から声とも音とも呼吸ともしれないものが漏れて、彼の口からぼん、と何かはじけて血がどろどろ流れた。白い、歯。こんな、ひどい男の、なのになぜ、こんなにも白い

ただ、二文字を、聞きたい、だけなのに。どうして私は、悠をこんなに好きなのだろう。どうして悠は私に、何も思わないのだろ。

もう、どうしたらいい。好かれるにも、嫌われるにも、どうしていいのか、ただ、わからない。悠はそこに横たわったまま息荒く、私はへたりこんで泣きに泣いた。

咽喉がひどく痛んで、目を覚ました。

まぶたが重くて視界も狭い。泣きながら寝てしまったのだということに気づく。部屋には煌々と灯りがついていて、血の匂いと二酸化炭素がまじってもわりとした重い空気だ。寝汗で髪の毛が頬や額にびったりとくっついている。上手く呼吸ができなくて、二、三回咳き込んだ。ひゅう、と気管の方で音が鳴った。狭い視界で辺りを見回す。と、いつて、何も変わりはない。悠は気絶してしまったのか、肩を大きく上下させて眠っているようにも見える。口から出ていた血も止まったらしく、とはいえ彼の口元やカーペットには赤黒い血だまりがはつきりと残っている。その中に浮いている真っ白い歯。あたしはふらふらと立ち上がって、そっと血だまりの中に浮かぶ歯を手にとった。どこから何番目の歯なのか全然検討がつかないけれど、タバコを吸っているはずなのに綺麗な歯は、もしかしたらやっぱりタバコなんかすってないんじゃないかとも思わせる。もう、どうでもいい。楽しくもないのに、震えた笑いがこぼれた。

悠は寝ている。汗をかいている。頬の熱が失われたらしく、青紫色にもう変色していた。彼を何度殴っただろう、何度蹴り飛ばしただろう、どれだけ悔しさを、愛しさを、感じただろう。よろよろとキッチンに行き、コップ一杯の水を飲んだ。血の味がした。

ミュージックプレーヤーを耳に突っ込んで、電源を入れた。電池マークが半分まで減っていて、でもそんなのどうでも良かった。日本語をまるで英語みたいに発音する歌手が、ぐだぐだと恋愛を歌う。人生を歌う。それももう、どうでもよかった。スニーカーをつっかけて外に出る。気づかないうちに雨が降っていたのか、もしくはこれから降るのか湿度が高い。気持ち悪いべたつきの中、私は歩き出す。ポケットには彼の歯が入っていて、それを思うと少し悲しくもあったし心強くもあった。足を一步踏み出すたびに彼を蹴っているような気がしたし、腕を交互に動かすたびに彼を殴ったみたいに指がじんじんと痛むような気がした。そうして、この湿気はさらに進みにくさに拍車をかける。が、私は止まっただけでいけないうる気がしていた。

END

## Boring to Me

<http://p.booklog.jp/book/40114>

著者：こんにやく

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mokokiko/profile>

イラストをお借りしました

はだし：<http://nobara.chu.jp/sss/index.html>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40114>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40114>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.